

# ジェンダー研究の宝庫 —台湾大学・公館エリア

張 瑋容 (同志社女子大学現代社会学部社会システム学科准教授)

## 1. はじめに

アジアで最も高い女性議員の比率(40%超え)<sup>1)</sup>、アジア初の同性婚法制化の実現(2019年)を誇る台湾。国連加盟国ではないため、世界経済フォーラムが毎年公開するGlobal Gender Gap Reportには入っていないが、国連が制定するジェンダー関連指標の測定法に従って算出した結果を見ると、たとえば2022年のジェンダーギャップ指数(GII)は0.751(0が完全不平等、1が完全平等を示している)で、台湾を含む世界146カ国の中で36位になっており、世界19位のフィリピン(GGI = 0.783)に続き、アジア2位となっている<sup>2)</sup>。このように、台湾のジェンダー平等の推進は世界各国からも注目されており、様々な要因の相互作用の中でこのような現状に至ったわけだが、その中で、ジェンダー研究の環境の充実は1つ重要な要因として挙げられるのではないかと考える。本稿では、台湾のジェンダー研究の土壌となる豊かなジェンダー関連資源について、台北を中心に紹介していく。

## 2. 学術の自由を誇る台湾大学

台湾における学術の殿堂とも言われている台湾大学は、1928年に、その前身である「台北帝国大学」として創立された。戦後の1945年に、中華民国政府の接收により「国立台湾大学」に改名された。1949年から1987年の間に、国共内戦の中で戒厳令が敷かれており、言論と思想の自由が厳しく制限された中でも、台湾大学は民主化運動の土壌となっていた。とりわけ70年代頃から、当時「党外運動」と呼ばれる民主化運動が台湾各地で起きており、台湾大学の大学生や教員も社会運動家、団体とともに、政府の強力な鎮圧に抵抗しながら、応援、連携をしてきた。このような民主化や言論・思想の自由を追求する歴史があったからか、台湾大学において、学術の自由は重要な信念として守られ続けてきた。

そんな学術の自由を象徴するのは、台湾大学の総合図書館である。豊富な資料を誇る台湾大学総合図書館において、専門書から博士・修士論文まで、ジェンダーの研究関

1) 「2022年度版『性別図像』、中高齢女性の労働力率(2020年)は52.3%に上昇」、<https://jp.taiwantoday.tw/news.php?unit=154&post=214089>、2022/12/20取得。

2) 行政院性別平等会、<https://gec.ey.gov.tw/page/E0810325D36C4E10>、2022/12/16取得。

連資料が数多く所蔵されている。しかし、実はここにはジェンダー研究の専門コーナーが設けられていない。ジェンダー研究の関連書籍はそれぞれの該当分野に配架されているため、むしろジェンダー研究以外の資料を目的に図書館を訪れる利用者が自然とジェンダー研究の資料に触れる環境になっている。また、とりわけ人文社会系の学部・研究科においてジェンダーを専門とする教員が多く、ジェンダー研究が盛んに進められていることも、ジェンダー関連資料の豊かさにつながると言えるだろう。さらに、1985年の女性研究室の創立は、台湾のジェンダー研究を牽引する象徴とも言える。当時は台湾大学人口研究センターに所属していたが、1999年に「台湾大学人口とジェンダー研究センター」に改名された。この組織は1997年に台湾初の女性とジェンダー研究プログラムを立ち上げ、幅広いジェンダー関連科目を開設し、学内のジェンダー教育に大きな力を注いできた<sup>3)</sup>。筆者自身も2002年大学2年生の時にこのプログラムを履修したことがきっかけで、ジェンダー研究の道を目指したのである。「台湾大学人口とジェンダー研究センター」は『婦研縦横』(Forum in Women's and Gender Studies)と『女学学誌』(Journal of Women's and Gender Studies)などの学術誌を刊行しており、学内だけでなく、台湾のジェンダー研究分野においても大きな貢献をもたらしている。

このような台湾大学には、もう一つ注目に値することがある。それは、台湾初の大学公認ゲイ・レズビアンサークルである。1993年にはゲイ・サークル“Gay Chat”、1994年にはレズビアン・サークル“Lambda”が正式に設立された。これらのサークルはLGBTQ学生に居場所を提供するだけでなく、LGBTQ人権運動にも積極的に取り組んでいる。たとえば毎年6月開催のGay and Lesbian Awakening Day(通称GLAD)という学内向けのイベントや、他大学のLGBTQサークルや同性愛者人権団体との連携も挙げられる。中でも図書関連のイベントが数多く開催されてきた。読書会・勉強会をはじめ、2003年のGLADにおいては、台湾大学周辺の書店と連携し、LGBTQ関連書籍を学内で展示販売会を開催後、集めた図書がサークルの専用部屋の「LGBTQ図書コーナー」で保存されている。このように、図書館からサークルまで、ジェンダーの関連資料を数多く所蔵する台湾大学は、ジェンダー研究の宝庫と言えよう。

### 3. 次世代フェミニストの育成：女書店<sup>4)</sup>

台湾大学から徒歩5分くらいの場所に、「女書店」という特殊な書店がある。1994年にオープンした「女書店」は、中華圏初のフェミニズムに特化する専門書店である。少

3) 台湾大学婦女研究室、<https://gender.psc.ntu.edu.tw/>、2022/12/20取得。

4) 女書店、<https://www.fembooks.com.tw/tc/home.aspx>、2022/12/20取得。他にも熱田敬子、金美珍、梁・永山聡子、張瑋容、曹曉彤編『ハッシュタグだけじゃ始まらない』(大月書店)のp.94~96を参照されたい。

し古い建物の2階に位置しており、狭い階段の両側の壁はジェンダー関係の講演会や演劇など多彩なイベントのポスターで埋め尽くされている。ドアを開いて入ってみると、中は決して広いわけではないが、静かで居心地良さを感じさせるような空間である。最初に印象に残るのは、店内に陳列されているヴァージニア・ウルフとフリーダ・カーロの大きな肖像画だろう。フェミニズムの開拓者の肖像を見ると、歴史伝承の有り難さと責任の重さをしみじみと感じる。

女書店の主要業務はフェミニズムや女性学関連書籍の販売と出版であり、店内に扱われる書籍はセクシュアリティ、男性学はもちろん、心理学、社会学、文学など分野も年代も幅広い。店内の一角は特集コーナーであり、テーマに合わせた書籍や関連グッズが展示されている。筆者が訪れた2022年8月頃は身体関連の特集だったため、生理、女性の健康、心理などの書籍がたくさん揃っていた。また、本棚に並んでいるジェンダー・人文社会系の授業で使う教科書や参考書を見ると、ジェンダー関連授業を履修する学生が教科書を買いに來る姿が目につく。

一方、非売品の珍しい年代物も展示されている。例えば、台湾初のレズビアン団体「私たちの間（我們之間）」が発行した隔月雑誌『ガール・フレンド』が数冊展示されている。この雑誌には恋愛相談、家族関係などレズビアンと関わるさまざまなトピックだけでなく、文通コーナーもあり、1990年代にレズビアン・コミュニティにおいて連帯感の構築に重要な存在となっていた。この雑誌は2003年に廃刊となったため、女書店では非売品として扱われるが、手にとって年季を感じるページをめくるだけでも、その貴重さを実感する。

このように、女書店は主に書籍の出版、販売を扱っているが、その他にジェンダー関連の講座や読書会も不定期的に開催し、知識の交流の場を担ってきた。台湾の女性学、ジェンダー研究において多大な貢献をしてきた女書店は、長年赤字のため、2017年7月に一時的に休業した。しかし、その存在意義と影響があまりにも大きく、社会各方面からさまざまな支援を得た結果、女書店は同年の10月に営業を再開し、今日まで継続してきた<sup>5)</sup>。

静かな空間を後にして、再びあの狭い階段を降りた筆者は、改めてあの力強い書体で書かれた女書店の看板を眺めた。古いマンションの一室を占める女書店だが、それが持つ力は決して小さくない。90年代からおよそ30年間、台湾の女性学、ジェンダー研究、フェミニズムの土壌を提供してくれただけでなく、次世代フェミニストやジェンダー研究者の育成にも惜しみなく尽力してきた女書店は、中華圏だけでなく、おそらくアジアにおいても揺るぎのない存在となっているだろう。

5) 女書店、<https://www.fembooks.com.tw/tc/page.aspx?mid=15>、2022/12/20 取得。

#### 4. LGBTQ の居場所：晶晶書庫

女書店から徒歩10分程度の場所にある、もう一つのジェンダー関連の空間を紹介したい。「晶晶（ジンジン）書庫」というLGBTQに特化する店である。住宅地に潜んでいるが、店頭に掲げられている巨大なレインボー旗は店の存在感を示している。1999年オープン当初はカフェ併設の書店であった。書店では主にLGBTQの関連の書籍やメディアコンテンツ、LGBTQのシンボルである6色虹のグッズ、セクストイ、下着などを扱っており、カフェはLGBTQの客で賑わっていた。ここは、LGBTQ当事者が世間の目線を気にせずに、関連商品を堂々と購入でき、仲間と出会える場でもある。カフェがあった当初、台湾大学のゲイ、レズビアン・サークルの学生や、同じく徒歩圏内に位置するLGBTQ人権団体「台湾同志ホットライン協会」のメンバー、ボランティアたちがよくここで集まったり、くつろいだりしたことをよく耳にする。このカフェは2003年に休業したが、その後はh\*ours caféに改名した。「晶晶書庫」から独立した後でも、LGBTQの当事者が気軽に訪れ、くつろげる居場所の提供というオープン当初の信念が2020年閉店まで継承されてきた<sup>6)</sup>。

「晶晶書庫」は現在、経営形態はオープン当初とかなり変わり、店名も「晶晶書庫、芸廊、生活広場」と変更した。筆者が2022年8月に訪れた時に、扱っている商品の展開が以前よりかなり拡大している印象を受ける。例えば、主にゲイ向けの写真集や雑誌は以前からあったが、BLマンガの取り扱いは、恐らくここ数年のことだろう。というのも、筆者が台湾大学在籍中の2000年代中盤まで、何回かこの店に訪れたことがあったが、そもそも当時、BLマンガは基本的に書店や貸本屋でしか取り扱われていなかった。LGBTQ消費者に特化する「晶晶書庫」にBLマンガが取り扱われているということは、台湾におけるBLの読み手の多様性を反映していると言えるだろう。

また、「晶晶書庫」のもう一つの特徴は、LGBTQ当事者向けのセクストイや下着の販売と言えよう。セクストイの専門店自体は他所にも存在しているが、一般的に入りにくい雰囲気があり、特にLGBTQ当事者にはさらに利用しにくい。ここなら、実物があるし、周りの目線を気にせずに購入できる。実店舗のみならず、オンラインショップも併設しているため、利用の利便性がさらに向上する。また、胸つぶしインナーの販売も、

6) 「h\*ours café 討論議題の彩虹咖啡廳」<https://vita.tw/hours-cafe-%E8%A8%8E%E8%AB%96%E8%AD%B0%E9%A1%8C%E7%9A%84%E5%BD%A9%E8%99%B9%E5%92%96%E5%95%A1%E5%B3%B3/>, 2022/12/16 取得。

「同志咖啡店熄燈／專法後卻撐不下去 20年彩虹燈塔說掰掰」<https://tw.news.yahoo.com/%E5%90%8C%E5%BF%97%E5%92%96%E5%95%A1%E5%BB%B3%E7%86%84%E7%87%88-%E5%B0%88%E6%B3%95%E5%BE%8C%E5%8D%BB%E6%92%90%E4%B8%8D%E4%B8%8B%E5%8E%BB-20%E5%B9%B4%E5%BD%A9%E8%99%B9%E7%87%88%E5%A1%94%E8%AA%AA%E6%8E%B0%E6%8E%B0-044545377.html>, 2022/12/18 取得。

以前から多くのレズビアン当事者が重宝する。このように、LGBTQ 当事者のさまざまなニーズに対応する商品を書籍と一緒に扱うということは、LGBTQ 当事者の日常生活のあらゆる側面を包摂する空間を提供していると言えよう。2019 年に同性婚法制化が実現され、アジアで最も LGBTQ フレンドリーとも言われている今日の台湾においても、「晶晶書庫」のような LGBTQ に特化する空間は、依然として当事者にとって特別な存在だろう。特に 1990 年代から可視化し始めた台湾の LGBTQ 人権運動と共に歩んできたという背景があったからこそ、台湾の LGBTQ コミュニティーにおいて「晶晶書庫」はかけがえのない意味を持つだろう。

## 5. 誠品書店台大店

再び台湾大学に戻ろう。正門の向かい側に、大手書店「誠品書店台大店」がある。日本でも支店を構える誠品書店は文学、科学、社会、芸術など幅広い分野の書籍、良質な文房具やハイセンスな雑貨を販売し、居心地の良い閲覧空間を提供している。中流階級かつ都会エリートの憧れのライフスタイルとテイストを醸し出す誠品書店が扱う書籍と商品は決して安くないが、幅広い年齢層のファンを獲得している。

誠品書店の独自性と言えば、他の大手書店ではあまり扱われていない専門書を多く扱っていることだろう。台大店は台湾大学のすぐ近くに位置することもあり、特に他の店舗より多くの専門書を扱っている。中でもジェンダー、セクシュアリティ、フェミニズム、社会学、洋書などの書籍の多さが印象的である。

前節で紹介した女書店や晶晶書庫と違い、誠品書店はジェンダー系に特化する専門書店ではないので、より専門的な書籍を求めるなら、前者の専門書店に行くだろう。しかし、ここに来ると、他の大手書店ではなかなか見ないフェミニズムなどの本と出会えることにも重要な意味を持つと考える。それは、ジェンダー研究は一般大衆の日常から隔たる特殊なジャンルではなく、日常に自然と溶け込んでいるということだ。そもそも、ジェンダーは人間と社会の一部であり、社会から孤立させられるべきではないのだろう。専門家だけでなく、さまざまな背景、年齢の人が利用するポピュラーな書店に、ジェンダー系の書籍が客の目に入りやすい場所に置かれたり、堂々と本棚を埋めたりすることは、筆者が考える理想の本屋のイメージなのだ。

## 6. おわりに

本稿は台北市の公館エリアを中心に、ジェンダー研究関連資料と出会える空間を紹介した。中でも、「女書店」や「晶晶書庫」のようなジェンダー関連資料に特化する専門店もあれば、ジェンダー研究の資料は他分野に遜色なくらいの豊富な蔵書量で存在感を

放つ空間もある。筆者にとって、両方の存在は同様に重要で、それぞれ違う意味を持つと考える。ジェンダー研究の重要性が依然として矮小化されている現状において、ジェンダー研究に特化する空間の構築は、ジェンダー関連資料を集中的に保存するという重要な役割を果たす。それと同時に、ジェンダーに特化しない、総合的な空間におけるジェンダー関連資料の「占領」は、さらに今までジェンダーに触れることのない人々の目に止まる契機にもなる。こうした意味において、いずれの形態の空間も徒歩圏内に集約する公館エリアは、台湾におけるジェンダー研究の宝庫と言えるのではないだろうか。コロナが落ち着きつつある中、もし台湾に行く機会があれば、ぜひ本稿が紹介した公館エリアのジェンダー研究の宝庫に行ってみて、実際に体感して欲しい。